

視点(1874)

日本はアメリカ流ライフスタイルの完成度高いモデル国家!!

(流通経済編)

アメリカの経済は、アメリカ流ライフスタイルの創出による消費を基軸とする経済大国です。アメリカ流ライフスタイルは「自由主義・個人主義・平等主義」の精神に基づく「富裕中産階級」「物質絶対志向」「ファミリー幸福志向」によって形成されています。

では日本の経済は、どのようなプロセスを経て、今日の姿が形成されたのでしょうか。

(1) 日本の経済プロセス

日本は、1968年の明治維新までの江戸時代は後進国でした。しかし、現在は世界第3位の経済大国です。日本の経済発展は2つの段階に分ける必要があります。

①戦前の日本経済の発展プロセス(イギリス型経済発展国)

日本は1868年の明治維新から日露戦争(1900年)までが「発展途上国」、日露戦争から第2次世界大戦(1945年)までが「新興国」に位置する経済国家でした。戦前の日本は、日露戦争までは独立維持の戦争を行いました。その後は当時の列強(イギリス、フランス、ドイツ、ロシア)を真似して他国を植民地化する帝国主義の道を歩みました。

植民地政策は後進国を支配し、自らの経済圏をつくり、そのためには強力な軍隊を持つために、決して国民にとっては豊かな生活レベルを維持することはできませんでした。貧富の差(資本家と労働者、地主と小作、貴族と庶民の格差社会)が大きく、決して消費を基軸とする経済大国にはなれず、軍事大国になり、国の経済力に見合わない国防費が国家の負担となっていました。

②戦後の日本経済の発展プロセス(アメリカ型経済発展国)

終戦により日本はアメリカの占領下になり、アメリカは二度とアメリカを中心とした白人社会に反抗しない平和主義国家(平和憲法の押し付け)と民主主義(義務のない権利のみの教育)と経済国家(豊かな生活)の3つの日本弱体化戦略(日本を大人しい国にする戦略)を政治的・経済的・社会的な面で推進しました。

特に、戦後のアメリカ流のライフスタイルを浸透させるためのプロパガンダ(政治的宣伝)は積極的に行われました。

テレビでアメリカ人の住宅(芝生のある庭や冷蔵庫のある台所やテレビのある居間、清潔なトイレ)や食卓の料理の豊富さ、自家用車で家族揃ってのドライブやショッピング、仲の良い対等な夫婦、自主主義の子供達等はテレビや雑誌、教科書、さらにはガリオア・エロア援助によるパン・ミルクの給食等は日本人を驚かせ、夢のような生活に映り、アメリカを憧れるようなアメリカナイズ化した思想教育をしました。

このアメリカ流のライフスタイルは、日本の経済が1941~1950年までの「発展途上国」、1951~1973年(1人当たりGDP1万ドル)までの「新興国」、1974年から「先進国」へと高度成長の道を歩みました。

(2) 日本はアメリカ流のライフスタイルの完成度の高いモデル国家

今日、日本のGDPに占める消費の割合は60%を超えており、アメリカの70%に次ぐレベルです。日本は戦前、植民地を基軸(満州国や中国)とする経済圏を確立して、国の発展を考えましたが、戦後は国富(くにの富)は足元(国内の国民)にあるというアメリカ型の経済政策を取り、そのため経済的には大発展し、1968年には日本はアメリカに次いで世界第2位の経済国家(今、中国に抜かれて第3位)になり、国民所得も1人当たり4万ドルと世界一級の富裕経済国家になっています。しかも、その中身は、アメリカ流のライフスタイルの創出による消費を基軸とする経済大国であり、**アメリカ流ライフスタイルの活用が世界一成功した完成度高いモデル国家**です。

しかし、1988年のモノ離れ後のポストモダン消費時代には、このアメリカ流のライフスタイルの創出だけでは成熟経済国家となった日本の経済成長は望めません。今後は、日本独自に創出されたライフスタイルに基づくニューモダン消費の出現が必要です。**アメリカ型経済の消費を「第1次ライフスタイル革命」とするならば、モノ離れした後、ニューモダン消費の経済を「第2次ライフスタイル革命」と呼ぶことができます。**

(株)ダイナミックマーケティング社⁺⁶

代表 六 車 秀 之